
いつか天魔の黒ウサギ～予言なんてどうにかなるさ♪～

イグス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか天魔の黒ウサギ（予言なんてどうにかなるさ♪）

【Nコード】

N8990Y

【作者名】

イグス

【あらすじ】

転生者、四ツ葉麗矢は突然いつか天魔の黒ウサギの世界に突然飛ばされた。

色々な能力が入りチート主人公

プロローグ（前書き）

初めまして、イグスです
暇と時間さえあれば小説書いていきたいと思っています

プロローグ

此処は何処だ？

俺は辺りを見渡す、辺りは一面真っ白な世界だった

(それにしても一面白い世界だな…何なんだ此処)

「やあやあ、こんにちは！君」

突然目の前に現れた白い服着た女性が現れた

「えっと…、どなたですか？」

「私？ 私は神様だよん♪」

は…？ 今何て言った、コイツ：

「だから、神様だってば、後ついでに言うとか此処あの世ね」

「(コイツエスパーかッ!) てかえっ!？ あの世!？」

「そう、あの世だよ、君は死んだんだよ、アタシが間違って時妙無くしちゃった♪ごめんね! (てへっ)」

バシッ!!

俺は思いつきり神の頭をたたき、結構良い音したな…:

「痛いっ! 何で叩くの!？」

「当たり前だろうが! 何人の時妙無くしちゃった♪だ! ふざけんな!」

「まあまあ、落ち着いてよー、ちゃんと謝ってんじゃん」

「お前から反省の色が見えない」

「そう? 私なりに反省してるんだけど?」

「ソウデスカ」

何だろう、この神様イラつくな…:

「なあ、そう言えば、何で俺は天国にも地獄にも行かずにこんなところに居んだ?」

「あ! そう言えば忘れてた、君を此処に呼んだ理由はね他の場所に転生させるためだよ♪」

「転生だと?」

「そうだよー、アタシのせいで君の時妙無くしたんだしね、そんならいいしないと、君の行きたい世界や場所ならどこでも」

「そう言われてもね、んーそうだな…じゃあ「いつ天」の世界で一度行ってみたかったんだよな、いつ天の世界

「了解、じゃあじゃあどんな力が欲しい？」

「力？ 何個でもいいのか？」

「オマケデ何個でもいいよ」

「そうか、なら…」

そう言ってポケットの中を探る、おっと有った有った

俺が中から出したのは紙と鉛筆そこに色々な能力を書いていく。

数分後、書き終わるとそれを神様に渡した

「ふむふむ、なるほどね…結構書いたね君、まあ問題ないけどさ」
なんか不安何だよな…この神様

「そうか、ならよろしく頼む」

「了解、そんじゃ行ってらっしゃい、良い人生を」

神はそう言うと、指を鳴らしたすると俺の視界が暗くなった。

プロローグ（後書き）

誤字などありましたら、教えてください、ではではまた次で！

転校生（前書き）

今日は、イグスです

更新しましたー！

これから頑張りたいと思います

転校生

俺は、目を覚ました。

（知らない、天上だ・・・）

俺は体を起こし、辺りを見渡す、どうやらここは自分のへやのようだ、ん？

俺は、机に手紙が置いてあることに気が付く

「んー、何々？ 神様から？」

やつほー！神様だよん！この手紙はいつ天の世界に送ったのを報告するためにかいたぞー

後、今の君の状況を説明するとだねー、君は独り暮らしで、これから宮坂高校に転校するんだよねー、だからまあ頑張ってこの世界で第二の人生頑張ー！以上！神様からでしたー。

追伸、能力はちゃんと君の言う通りしたからね

「神様軽すぎるだろ・・・」

俺は読み終わると手紙を折り畳み時計を見ると、8時半を指していた

「うお！？ 結構ギリギリじゃね？」

俺はあわてて制服に着替えると「腑罪証明」を使って学校に向かった。

数分後

俺は教室の前にいる、あの後校長にあって教室を案内されたら、まさかの黒鉄大兎がいるクラスに転入だよ、

「では、四ツ葉君、入ってきなさい」

お、先生から呼ばれたな、なんか緊張するな
俺はそう思いながら教室に入る

「四ツ葉春樹です、よろしくお願いいたします」

」

そうやって俺はにこやかスマイルをすると、数人の女子がの顔が赤
くなっていた、何でだろう？

挨拶は、まずまずかな？ 席はっと・・・

「先生ー、黒鉄君の後ろが空いてるからそこでいいと思いますーす」

一人の女子が言うのと、先生も承諾したようなので俺は、黒鉄の後ろ
に座ると、

「俺、黒鉄大兎よろしくな！」

「俺は四ツ葉春樹だ、春樹でいいぜ？ 黒鉄も大兎でいいよな？」

「ああ！」

大兎結構いいやつだな、元氣いいし
すると、大兎の隣の女子、時雨遥も自己紹介してきた。

「私、時雨遥よろしくね、四ツ葉君」

「よろしく、春樹でいいぜ？」

「なら、私も遥でいいよ」

ふむ、これでいつ天の主人公と、メインキャラクター二人と接触できた、後はヒメアに紅と未雷とセルジュとハスガか・・・、あ、後黒守と泉だけか、結構いるなー、まあなんとかするか、そう言うてる内に昼休み

俺は死んでいた、なぜなら、クラスの女子が休み時間になって毎回俺の回りに来て、四ツ葉はどんなことしてるの？とか、色々と質問攻めされて休める時間がなかったからだ、

まあ全部答えましたよ？ 周りの男子からは、なんか睨まれるしさ、疲れたよ

そして俺は昼休みになると女子から囲まれる前に素早く教室から逃げ出して学校の自動販売機の前にいる、

「ああ、転校そうそう、なんなんだこの疲労感・・・」

俺は自動販売機でコーラを買うと、教室に戻ろうとすると、

「おい、貴様」

「ん？誰？」

俺は振り向くと、そこには紅月光がいた、すると

「おい、貴様それを寄越せ」

自動販売機を見るコーラのボタンに売り切れと、書いてあった、どうやら俺の買ったので西後らしい、他の自動販売機を見るとどうやらコーラは売られてないらしい、すると俺は紅月光に言った

「嫌だ」

ザンッ！

「うをお！？」

月光は剣を鞘から抜き斬りかかってきた

何なんなのこいつ！？　どんだけコーラがほしんだよ！
そう思いながら、俺は剣の攻撃をすらすらと避ける

「何故攻撃が当たらない、糞が、さっさと寄越せ」

「いきなり、斬りかかる奴にやるかアホ！」

「誰がアホだ」

「お前だ！」

「俺は天才だ」

そう言いつつ、月光は攻撃をやめようとしなない。

何！？　何なのコイツ、うざいんだけど！

俺は思いつきりバックステップをすると、そのまま全速力でその場から離脱した。

「ちっ、逃がしたか・・・」

月光は剣を鞘かに納めるとその場を後にした

転校生（後書き）

こんな感じになってしまった。orz
やっぱり小説書くの難しいですね
頑張らないと！

疲れた（前書き）

今日は！イグスです
今回は短いです

疲れた

結局、俺は紅月光のせいで昼休みもろくに休めず午後の授業を受け、HRの真っ最中である。

「まさか、初日でこんなに疲れるとは・・・」

ただいま、俺机に顔を沈めて脱力中

「大丈夫？春樹君」

「ああー・・・遙、大丈夫に見えるか？春樹の奴」

「見えない・・・」

大兎と遙は優しいね、それにしても疲れた、マジ疲れた、女子に質問攻めされるは、月光には斬りかかられるは本当に疲れた、HRが終わると俺は鞆を持ち

「俺帰るわー」

「おう、じゃあな春樹」

「さようなら、春樹君」

「おー、大兎と遙じゃあなー」

そう言って手をふりながら教室を出て、「腑罪証明」で家まで戻る、

「あー、本当に疲れたな、それに腹減った」

俺は、キッチンに行き冷蔵庫を開ける

・・・何もない、はぁ・・・買い出し行くか

俺は、制服から私服に着替えると家を出て近くのコンビニに行く

「今日は、弁当類とサラダだけでいいか・・・、おっと、明日の朝食も買わないとな」

色々食材を買ってコンビニから出ると、

ドンッ

誰かとぶつかった

「おっと、済まん、大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ」

あれ？ コイツもしかしてアンドウーのミライ？

「何々？私の顔になんかついてる？」

「ああ、済まん、ぼーっとしてただけ」

「ふーん、そうなんだ、あっそう言えば、ドクターペッパー買わなくちゃ！」

そう言って、未雷はコンビニに入っていた

ふむ、以外と可愛かったな、おっとそろそろ帰ろ・・・

原作へ

俺が転校してきて、一週間がたった

あれからは何とかクラスには馴染み結構友達ができた、大兎と遥とはメールアドレスを交換したりした、やっぱり関わってくるキャラだし、そう言えば俺の家と大兎たちの家が徒歩でが分くらいと意外と近くにあって驚いたな。

そんなことを思いながら俺は何時ものように登校する。

「ふぁー・・・、眠（あー、早く原作へ突入しないかなー）」

欠伸をしながら教室に入ると、クラスの友達が挨拶してくる。

「よく、大兎、遥おはよー」

「おはよう、春樹君」

「うーす、春樹、ふぁー眠」

「大兎、眠たそうだな」

「ふぁー、なんか最近睡魔が襲ってくるんだよな」

「もー、大兎最近夜更かしばかりしてるんじゃないの？」

遥はそういいながら、心配する

「大丈夫だって、遥」

大兎は欠伸を噛み締めながら言う

「そう言えば、教室午後授業何だっけ？」

「今日は確か、家庭科と国語だよ、春樹君」

ん？もしかして今日大兎はヒメアと会うのか？

「サンキュー、遥」

俺は遥にお礼を言うと、席に付くと同時に先生が入ってきて朝礼が始まった。

あれからは六時間目、どうやら山田先生は原作どうり体調不良で休みのようだ、大兎も五時間目の途中から眠いについたらしい、六時間目の終わりのチャイムも鳴り、遥は大兎を時々見ては心配していた、俺も何度も揺さぶったり叩いて起こそうとしたが反応無し、そしてHRも終わった。

「それにしても起きないな、大兎」

「そうだね」

そう言うと、遥は大兎を揺さぶった

「ねえ。ねえってば！そろそろ起きてよ大兎。もうホームルーム、とつくに終わっちゃったよ？」

「おーい、そろそろ起きろー」

すると

「うーん？」

「お、やっと起きた」

大兎は、小さくうめきながら、目を開けた。

「・・・・・・・・どした？」

「もおー、どしたじゃないでしょー。大兎ってば、五時間目からずつと寝てるんだよ？先生が起こしても起きないし」

「・・・・・・・・へ？五時間目から？って、今何時？」

「三時二十分だぞ」

「うお？もうホームルーム終わってんじゃない」

「だからそう言ってるじゃん」

遙はあきれたとうな顔で言う。

「嘘だろ？」

「嘘じゃねよ」

「マジ？」

「マジ」

「……あゝ、机下げた方がいいよな？」

大兎が言うと、女子たちが当然でしようがという顔で大兎を見て頷く、机を持ち上げると、

「ちょっと遥、春樹、なんでおこしてくれないのよ？」

「何度も起こしました」

「嘘つけ」

「逆に嘘ついてどうするよ？」

「じゃあなんで俺、起きないのよ？」

「そんなの知らないわよ。だいたい大兎ってば、山田先生が殴っても起きなかったんだよ？そんな寝坊助私達がどうにかできるわけないじゃん」

「や、山田怒った？」

すると遥は神妙な顔で頷く。

俺は大兎のうしろで笑いをこらえてた。

や、やべ、大兎信じてる、くくくっ

「まじかよ!」

「なんてねくん。うそうそ。今日は山田先生体調不良でお休みでし

た。」

「……ぷっ、騙されてやんの」

「……おまえら、まじ殺すぞ?」

「はっはっはっ。やってみなさい大兎君」

遥はそう言う。空手のポーズを取る

「って誰だよそれ」

「私の名前は、ジェットキーさんだ」

「そんな奴居たっけ?」

「カンフーの人って、ジェットキーだろ?もしくは、ジェットか?」

「わかんない」

「もしかしたら、ジェットキーとジェットを合わせたのジェットキーじゃないのか?」

「さあ?」

「わかんないのならやんなよ」

大兎はあきれてためいきをはく、そうこうしているうちに掃除は終わっており机を戻す

「やべー、俺寝すぎ」

「確かに寝すぎだな」

俺がそういつてると、

「うお？は？おまえ、何すんの？」

遥が大兎の唇に着いたよだれを指で取っていた。

「え？あ、よだれついてたから」

そう言って、遥はよだれをぬぐおうとしていた。

「・・・いやいや待てって。えーと、そりゃ、まずくないか、なあ
春樹」

何故こっちに来る

俺はそう思いながら、机から本を出しよ

「華麗に無視すんなよ」

知るか！今その中に入ったら俺KYだろ
ほら、周りの女子たちお前らみてるだろ
さーてと、久しぶりに買ってきたソード○○○オンラインでも読ん
でみるか♪

数十ページまで読み終わると、きゃあああああ！と女子たちの悲鳴
が上がった
が無視する、それからドアが吹っ飛び男が倒れたのもスルーする。

やっぱり、ソード○○○オンライン面白いわー、何回よんでも飽きない。

それから又、きゃああああと今度は甘い声で叫ぶが俺にはどうでもいいことなのでスルー、本を読んでいる俺はどんなことでもスルーするのがもつとうだ！

すると、目の前に誰かが立ったがスルー・・・

「おい、貴様」

ピシッ、本を読んでいる俺は止まってしまった、何故なら今の声は以前自動販売機で聞いたことのある声だったからだ、俺はそーと本から目をはなし顔をあげるとそこには、俺に斬りかかってきた紅月光がいた

「・・・どちら様でしょうか？」

俺は紅月光が嫌いだ、確かに俺は神様から貰ったスキルがあるが俺はコイツのこと嫌いだ、精神的にも物理的にもなんかイライラする

「もう忘れたか、屑が、とんだ屑だな」

紅はそう言うと、

鼻で笑い教室から出ていこうとすると途中で止まり、

「屑、後で生徒会室に来い」

そんだけいうと出ていった。

俺はそのまま机に顔を沈めた。

うわー、だるいよなんか脱力感が物凄く出てきた、何なのあいつだるいんですけど！

「大丈夫か？春樹」

「ダルイ、物凄くダルイ、まるで50キロの重りを背負ってグラウンド百周走らされたぐらいダルイ」

「そんなわけないだろ」

「いやいやそれがそのくらい有るんだよ、ああ、生徒会室行きたくねー」

「それにしても、平凡な俺の人生とは、まるで正反対な奴だな」

平凡ね・・・、それが終わるとは知らないからな、大兎は

「もお、大兎は平凡じゃないよ」

「平凡だろお」

「違うって」

「違わないって」

大兎と遙は話している途中で俺は席を立った

「あれ？どこ行くんだ？春樹」

「さっき、生徒会会長様から来いって言われてただろ？だから行くんだよ、ダルイけど」

俺はそう言って、じゃあなっと後ろに手を降り教室から出ていった、

そしてすぐに「腑罪証明」を使い生徒会室の前まで行く。

波乱

俺は生徒会室の前まで来ている

（はぁ、入りたくねー）

俺は、ドアに手お当ててため息を付く、

「失礼します」

俺は、ドアを開けると、椅子に座る、紅月光がいた。
俺はドアを閉めると

「おい、貴様」

「・・・何ですか？」

俺は嫌そうな顔で月光を見る

「お前は一体何者だ？」

「なんのことですか？」

「とぼけるな、俺がお前に斬りかかっていたときお前は全ての攻撃を避けていた、全部だ、そこら辺の屑ではあり得ない」

「・・・」

「貴様のことも調べさせて貰ったがなにも無かった、もう一度いう、

貴様は何者だ」

「隠してもしようがないし、簡単に言うと、規格外であり人外見たいな感じですかね？ 後、この学校について色々知っている軍とか聖地とか」

「・・・ふん、そうか」

紅はそう言うのと、何もない話さなくなった

え？ そんだけ？ 意外と驚かないし、それに終わったんなら帰っていよね？

俺は入ってきたドアから出ようとするのと、

「おい、どこへ行く」

「もう用心終わったから帰るんだけど」

「いつ誰が帰っていいと言った」

うわー、何コイツ、

俺がそう思っていると、

「ゲッコウ！ ただいま！！」

ドアが開き誰が入ってきたY

「遅いぞ、雑魚」

「雑魚じゃないいいいい！ってあれ？知らない人いる」

「コイツは今日から生徒会に入る奴だな」

は？今何て言った

「誰が生徒会に入るって言いました？」

「お前だ雑魚」

何！！？

「俺は「お前に拒否権は無い」・・・！！？」

はぁ、原作よりうざくないか？コイツ

「まったく、わかったよ、入ればいいんだろ、入れば」

「ふん、最初からそう言えばいいんだ」

「なにになに？どうなったの？」

「うるさい、雑魚」

「雑魚じゃないいいいいいい！」

「疲れた、寝る」

紅は未雷を無視して、腕をくみ目をつむる。

「無視すんなあああああ！」

「睡眠の邪魔するとおこずかいやらんぞ」

「・・・」

未雷は紅に言われるとすぐに黙った。

「どんだけだよ」

そういいながら、俺は椅子に座る

「あ、俺四ツ葉春樹よろしく」

「安藤未雷だよ、よろしく」

「なあ、月光っていつもあんな感じ？」

「うん、そうだよ」

「ふーん」

「おい、お前ら」

俺と未雷が話していると紅が呼んだ

「なんだ？ 月光」

「来るぞ」

紅がそう言うのと同時に。

ドン！

という音がした。

それに彼らは、

横を見ると数人の影があり窓を銃で殴ってる姿がうつった

「紅月光！君は包囲されている！おとなしく投稿するなら、命までは奪わない。扉を開けて、出てきなさい！」

なんて声が聞こえる。

そして無理矢理、力業で扉を開けようとしている、それに月光は

「そんなんじゃないよ、その扉は。すでに術で封としてある。専門の解呪屋でも呼んで来ない限り、その扉は開かない」

すると外にいる男が言った。

「解呪屋はもう手配した。扉が開くのは時間の問題だ。だが、その前に投稿すべきだ。自分の命が大切・・・」

「おい、四ツ葉」

紅は外の男を無視している

「ん？何」

まあ俺も外の声は無視してるけどな、どうでも良いし。

「外の足止め出来るか？少し用事がある」

「もしかして信頼してる？それってつまり、生徒会の仕事？それとも俺のこと試してる？」

「両方だ、それに「拒否権は無いだろ？」・・・そうだ」

「まあ、数十分は出来るかな？」

「分かった、あとは頼む、未雷行くぞ」

月光はそう言うと、未雷を呼び聖地を開きそのなかに消えると穴も消える、俺は机の上に座る、同時に扉が開き軍の人が武器を構えて入ってくる

「紅月光はどこだ！」

軍の一人が言う。

「残念ながら一足先に行きましたよ？」

「ほう、なら場所を教えてくださいませんか」

「残念ながら俺会長に足止めをしとけって言われたんですよー、だから教えるわけには行きません」

「そうか、なら力づくでも聞かせてもらわないとな」

そう言うと、軍の人たちは銃を構えるが

「【グラビティ】」

俺はそう一言言うと俺以外の軍の人たちが地面にひれ伏す。

「があ！」

「あーすいません少し強くし過ぎたかも知れませんね」

「化け物め！」

「化け物？違うぜ？ただの人外だよ」

そう言って俺は机から降りると、

「あ、その力あと三十分続きますんで」

そう言って俺は「腑罪証明」で大兎たちがいる公園へ移動する

聞い

「よっと、到着」

「腑罪証明」で大兎たちがいる公園へ移動した俺は茂みの近くに移
動する

「お、やってるやってる」

公園の中央では大兎たちが月光の弟、日向と日向の使い魔と戦って
いた。

俺は「知られざる英雄」を発動させて、「腑罪証明」で蜘蛛の背中
に移動すると

「おお、意外と良い眺めだな」

「「!?!?」」

大兎たちが一斉に、俺の方を向いて、驚く

「なっ、春樹!?!?」

「ちーす、大兎助けに来たぞ」

そう言って俺は、「腑罪証明」で大兎たちの側へ移動する

「・・・学校の方はどうだ？」

「ん？ああ、あと三十分はこれないと思うぜ？会長」

「ふん、そうか雑魚としては上出来だな」

「ヘイヘイ」

月光は、そう言う俺は軽く返事をして敵、紅日向の方を見る

「君は誰だい？」

日向は無表情のまま言う

「俺か？俺は四ツ葉春樹以後よろしく、
紅日向君」

「・・・君とは初対面のはずだけどどうして僕の名前を知っている
んだい？」

「まあ、予言のこと知ってるからね」

「ふーん、というと予言の関係者か、でもおかしいな、予言には君
の名前出てこないんだけど」

「それは俺が規格外だからね、予言には入らないよ」

「ふーん、まあ、君みたいに弱い人間はここで死ぬんだか、どうで
も良いか」

日向は言うど、蜘蛛に命令を出す、俺はそれを見て笑みを浮かべて

「弱いね・・・その蜘蛛殺して生きてるように幻覚かけたけど、まさか見破れないとはね」

「!!?」

そう言っただけは指をならすと幻覚が消える。

そこには無数の槍が突き刺さった蜘蛛のしたいがあった死体があった

あ、蜘蛛殺したの蜘蛛から移動した時ね！

「君、人間じゃ無いでしょ」

日向は無表情だが、驚いた様子だった

（会長、今からあいつ倒すから出てきた核斬って）

（・・・分かった（何故知っているんだ））

「いや、人間だよ、（人外でもあるけどね）」

「ふっ、普通の人間にコイツは殺られないよ」

日向はそう言うなり俺に向かって光の衝撃波が俺に向かって来る

「春樹危ない！」

「大丈夫だぜ、大兎」

すると衝撃波が俺当たったが、パンッ！と音が出て衝撃波は消滅した

「なっ」

「あ、俺魔法効かないから」

何故なら、俺の体全て「幻想破壊」つけて貰ったからさ♪

日向は驚く、そして好きが生まれる俺はそれを逃さなかった、俺は腕をあげて降り下ろすと日向の体にいくつもの槍が刺さっていた

「くっ！」

日向は呻くと、

日向体から小さな球体が出てきた、月光は俺の言った通り、素早く球体を斬った

「お疲れ、会長」

「ふん」

月光は素っ気なく返事をする

「おおー！ハルキ強い」

未雷がはしゃぎながら言う

「春樹、なんかサンキューな」

「まさか本当に倒すなんて・・・」

大兎そしてヒメアが言う、ヒメアは少し警戒してるようだ

「それにしても、生徒会入って初日からこんなにハードとか何か疲

れた」

「ええ！？春樹生徒会入ったの！？」

「半強制だったけどな」

「てか、疲れたとか言うわりに元気じゃね？」

「いやいや、疲れてるよ？精神的にも肉体的にも、もう終わったし家買えるな」

俺はそう言って「腑罪証明」で家に移動する

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8990y/>

いつか天魔の黒ウサギ～予言なんてどうにかなるさ♪～

2011年12月3日14時50分発行